政治とその内幕

――『ジュリアス・シーザー』覚え書――

秋葉　敏夫

エリザベス朝末期、一五九九年に、今また公衆劇場の一つ「地球座」が創設される。これはシェイクスピア（一五六四――一六一六）の属す劇団の本拠地となるところで、『ジュリアス・シーザー』はその「こけら落とし」として初めて上演されたものらしい。それをシェイクスピアの作家活動に当てはめれば、いわゆる喜劇を除くと（喜劇は作家活動の前期、中期にわたるし、作品の性質上この芝居は喜劇とはほとんど関係ない）、彼が習作期や前期の、英国史に題材を求める「歴史劇」を終えて、円熟期の「四大悲劇」と「ローマ史劇」へ向かう時期となる。『ジュリアス・シーザー』は「歴史劇」の扱う政治的側面を強く含むし、性格悲劇の傾向を秘める点で四大悲劇、それもとくに『マクベス』との類似性が深い。また「ローマ史劇」との関連では、登場人物の一人アントニーの結末が『アントニーとクレオパトラ』で描かれるかたちになる。シェイクスピアの劇作三十六、七編のうち、『ジュリアス・シーザー』はほぼその中間に位置し、いわば異なる作品群を結びつける、かなり重要な役割を持っている。

この作品は歴史上の出来事、古代ローマの英雄シーザー暗殺に材料を採る、非常に生真面目な政治劇である。物語は圧制者になりそうなシーザー暗殺とその復讐を中心に扱う。登場人物は古代ローマの名だたる政治家たちで、女性の登場場面はすこぶる少ない。シェイクスピアは直接の資料を、仏語からのトマス・ノースの英訳版『プルタルク英雄伝』によっているらしい。この場合、彼はその典拠にほとんど忠実に従うのだが、それでも例によって自分なりの解釈を加え、独自の世界観を展開してくる。ジオフリィ・ブラウのことばを借りれば、「この劇作家は『ジュリアス・シーザー』のなかで、歴史的人物にやや超然とした雅量ある態度を示し、同時に政治やそれに参加する人びとへ批判的態度を貫く[1]」ということになる。「歴史劇」を書いて得た作家の政治認識が導入され、政治世界の冷酷さ、醜悪さがその内幕を垣間見せるように、たくみに描かれる。そして『ジュリアス・シーザー』はいかにも殺伐とした政治劇だが、その特徴の一つは政治世界における個人のとらえ方である。公的生活にも働いている個人的感情の重視である。登場する立派な政治家の心には、それぞれ、善悪相反する感情や長所、欠点、また性格的強さ、弱さが同時に存在している。これは作家による人間の全体像の把握と一致するわけで、この作品を身近かなものにする大きな理由となっている。

例えば主な登場人物四人について、少し考えてみるとよい。彼らは公的人間面だけだといささか陥りがちな、単なる典型ではないのである。シーザーは威厳ある君主的性格を持ち、同時にその傲慢な態度は暴君への可能性を秘める。自分に対する三人称「シーザー」

の使用は、意識する政治的人間としての強大さと自信のほどを示してくる。ところが彼はてんかんに悩み、迷信深い人間である。キャシアスによれば、荒れ狂うティベール川を対岸まで泳ぎ切ろうと挑戦させておきながら、彼は濁流に押し流されて悲鳴をあげるし、熱病の時には震え怖く小人にすぎない。個人的弱点は庶民のそれと少しも違わないように描かれる。ブルータスは思索的な理想家で、いわば理論の武装がないと行動できない。彼の現実認識は甘いし、また廉潔への自信や執念は時には仲間から恐れられるほどの冷たさを秘める。キャシアスはブルータスとかなり対照的な人物で、前半の主役ともいえる政治的性格の体現者である。その行動の動機は個人的感情そのものだし、鋭い現実感覚は誰にもひけをとらない。彼の胸中には利己心とともに、友情への信頼や、自説を下げる時の素直さがある。そしてアントニーも、キャシアスと同類の政治的性格を体現する。彼は表面は明るい社交的な人物で、ブルータスによれば、「なにしろ、遊び好きで、道楽者で、人との交際が大好きだからな」[12]ということになる。だがシーザー暗殺後は、その政治的性格を徐々に現わし、彼は狡猾陰険な策士に変身する。アントニーは後半の主役とも考えられ、その鋭い現実の読み、それに則した策謀ぶりは、キャシアスに勝るとも劣らない。

シェイクスピアの描く主役あるいは中心人物は、王候貴族や将軍といった高位の人びとが多い。とくに「四大悲劇」や「歴史劇」や「ローマ悲劇」は、その傾向が強い。エリザベス朝の観客は舞台の上でその歴史的興味を満足させたいと思ったし、そういう高位の人びとの活躍を具体的に見たいと思ったのだろうと推測される。シェイクスピアは劇作家および演出家として、観客の好みを熟知している。彼はその高位の人びとが人間として庶民である観客から遠く離れた存在だとは描かない。彼らは良かれ悪しかれ人間的魅力を誰も持ち、その長所、欠点、また精神的葛藤や苦悶に共感を抱きやすくなっている。あるいは断片的に示される家庭面などで、市井の人間とたいして変らない彼らに、多かれ少なかれ親近感も沸きやすい。

『ジュリアス・シーザー』は二、三の点で、数年後の『マクベス』に類似している。例えばその主題を反逆者の運命と自己認識ととらえるなら、この作品は『マクベス』の不充分な先駆作である。また、もう一つの隠れた主題が立派な為政者、高潔な政治家とはどういう者かということになる。『ジュリアス・シーザー』には、ローマ人であることに誇りを持つ、高潔な政治家が多く登場する。彼らは、ある意味で重要な役割を果たす、無知蒙昧な群衆と比較される。ところが、「高潔」とはどういうことか。そういう精神の持主が何人描かれているか。政治という陰惨な、どす黒い現実のなかで、彼らの「高潔」は歪められ、汚され、利己的なものになっているのではないか。精神の腐敗を暴き出す、ものごとの否定的アプロウチは、それだけ一層肯定面の価値と欲求を暗示してくる。

『ジュリアス・シーザー』の場合、主人公は誰か、主題はどういうことか、さまざまな議論が可能だろう。標題のシーザーは途中で殺され、姿を消すし、物語の流れも演説の場面を軸に前半と後半とがはっきり別れ、それに応じて活躍する人物も交代するからである。概して主人公と主題とはかなり密接な関係を持つが、標題の人物が常に主人公とは限らない。題名は芝居であれ小説であれ、多くの場合、たいした意味を持たないだろう。エリザベス朝の人びとには、ジュリアス・シーザーの名前は非常によく知られたものだったと推測される。また作品のなかで、シーザーは殺されたあとも幽霊になって登場しその影響力は大きいといっても、ただ為政者の欠陥が目立つぐらいで、彼を主人公と呼べるほどの確かな主題は見つけにくい。また前半でシーザー暗殺の扇動者となるキャシアスや、後半で

その復讐を果たす中心人物アントニーの場合も、同様である。前者は後半だとやや影が薄いし、後者の前半での存在感は非常に弱い。彼らはいわゆる典型ではないのだが、その役割は政治的性格を現わすこと、政治の本質を示すことのようにさえ思える。そして、こういうキャシアスであれアントニーであれ、彼らの主な対象が芝居全体を通じて登場場面の多いブルータスだというのは注意してよいことである。彼の心理的葛藤は相当深く描かれるし、他の人物と比較して、彼の性格には主人公にふさわしい厚みが見られる。それも、政治認識や現実感覚の欠如という性格上の欠陥が問題なので、「四大悲劇」の場合と似た性格悲劇の主人公である。『ジュリアス・シーザー』と『マクベス』との類似はすでに触れたが、ブルータスはマクベスと同じような体験をし、同じような認識を得ている、マクベスの先駆者といってよい。

ブルータスの性格は、まさに政治世界のなかでは不向きなものである。例えばその特徴を、現実を見失うほどの理想主義、他人の意見を採り入れない自分勝手な頑固さ、廉潔や公明正大を尊ぶ並はずれた執念などと要約してみる。程度の差こそあれ、それらは平凡な生活では見過されても、厳しい政治世界では致命的な欠陥となり得る。この作品におけるブルータスの破滅過程は、政治世界の特徴をたくみに暗示するのである。物語展開の核心部で、彼はキャシアスの忠告を三度退ける。彼はアントニーを殺害対象からはずし、彼にシーザー追悼の演説を許し、フィリッピの戦場へ兵を進める。政治行動はいわば勝負の世界に似て、結果が第一の非情な世界である。たとえ目的が初めにきても、ひとたびそれが遂行されれば、大義名分はあとからどうにでもなる。ブルータスの場合、それらの結果はどれも彼の意図の裏目に出る。良かれ悪しかれ政治世界に存在する、彼の理想主義を受け入れぬ現実性、彼の公明正大を追いやる狡猾さなどが示される。政治感覚とは、所詮、現実の流れをとらえ、的確な判断と柔軟な行動でなんとか生き延びる、現実感覚の最たるものである。政治は少なくとも、過去と未来を材料に現在を扱い、現実の動きに厳しく審判されるのだから。

『ジュリアス・シーザー』の暗殺劇は、シーザーに対するキャシアスの嫉妬という、個人的動機が発端である。もっともらしい公的理由は二の次にすぎない。彼はローマの君主に選ばれそうな、シーザーの人気を妬んでいる。そしてシーザーが自分より勇気もないし、ブルータスの上に立つべき人間でないことを強調する。だが、彼は一人でシーザー暗殺を企てるわけではなく、その狡猾な論理とたくみな弁舌で同志を巻き込む。集まる人物は八人に及び、彼らは自然とそれなりの役割を背負う。ところが、この集団行動こそ政治活動の基本的な一面を写し出している。政治においては、政策決定とその遂行は人びとの協力体制によるのが普通だからである。たとえ前者が個人の意思でなされても、その遂行は集団に委ねられるだろう。政治世界における個人の力は弱く不安定で、味方で構成される集団の力がその個人の立場を安全なものにする。悪い意味で「徒党を組む」というのも、そのためにすぎない。シーザー暗殺後、ブルータスが騒ぎ立てる民衆たち、キャスカのことばを借りると「あのぼろ屑ども」[13]の理解を得て、彼らを味方につけようとするのは、いかにも政治的な行動である。それは政治の論理にかなっているが、彼はすぐ政治感覚の未熟を暴露する。彼はただ公明正大を振りかざすだけだし、庶民を相手の演説において、抽象的な論理の力の限界を知らない。アントニーが巧妙に用いる、目前の証拠が武器の、感情に訴える力の強さを、彼は知らない。

理想はどうであれ、政治の実体は力のメカニズムに支配されている。それは一つの勝負の世界であり、政治の多くの様相はここから

派生する。人びとは力を求めて仲間を集め、目的遂行のために手段を問わない。その傾向は、ものごとの是非と同じく、成功した結果によってほとんど正当化される。「勝てば官軍」とか「力は正義なり」といった論理が、政治世界には当てはまる。『ジュリアス・シーザー』は、ただ政治理論を扱うものではない。そこで演じるのは、あくまで個人的には有能、高潔な人間たちである。この作品の見事さは、作者シェイクスピアがそういう政治理論の基本を踏まえ、そこから派生する政治の汚れた諸相を中心に、政治に振り回される人間の姿を鮮やかに描いているということである。L・C・ナイツは、『コリオレイナス』と一緒にして、『ジュリアス・シーザー』の要点を次のようにまとめている。

……『ジュリアス・シーザー』も『コリオレイナス』も、一つの道徳上の決まり文句で要約することはできない。しかし一緒に取り挙げると、最も重要な関連した真実を、それらは二つ指摘している。まず初めは、現に人間の存在の方がいかなる政治の抽象概念より、持ちこたえ難いけれども、一層重要だという真実である。二番目に来るのは、政治が堕落、腐敗していて、政治家になると、階級や政党や国家といった境界線のかなたに、人間の意識を失なうほどだというものである。両方の芝居とも――とりわけ『コリオレイナス』は――今日、人間尊重の必要に迫られている、現実意識の重要性を改めて教えてくれる。[4]（傍点原著者）

ところで、政治の集団活動における、個人の役割はどういうものか。個人の人間性が充分に守られ、友情や信頼、忠実といった価値ある美徳が、そこに存在するか。この問いかけは、やはり政治理論というより、現実の政治力学を考察することである。そして『ジュリアス・シーザー』は、たとえそれが反逆劇で政治の混乱期を扱うにせよ、その問いに端的に答えていて、答えは確固たる否定である。生きるか死ぬか、自己の存在を賭けた政治行動では、理想は押いやられ人間性は無視されている。また美徳といわれるものも、存在するのは歪曲された友情やへつらいのかたちを取る忠実などで、その本来のすがたは見られない。そしてこれらの状況を説明するのは、多くは集団の利益という大義名分である。政治メカニズムはいわば本質的に腐敗の可能性を秘め、その広大な影響力のもとで、政治の内幕はまさに汚濁と醜悪さにまみれることとなる。物語後半で、表面は平静を装いながら、あたかも復讐の鬼と化すアントニーは、その体現する政治的性格を次のように喝破して、聞き手のオクテイヴィアスをあきれさせる。

アントニー　……ところで、レピダス、君はシーザーの屋敷まで行ってくれ。遺言状を取って来てくれ。我々で決めておきたいのだ、例の遺産処分のことだが、なにか金額を少しでも削減する手立てを。

レピダス　それで、君たちはここにいるのか？

オクテイヴィアス　ここか、もしいなければ、議事堂だ。（レピダス退場）

アントニー　なんの取柄もない、くだらん男だ、まあ使い走りが分相応だろうよ。いいのかな、天下を三分するとして、奴もその一つを受けるのは、それだけの力を認めるのは？

オクテイヴィアス　それが君の考えだった、だから奴の意見を入れて、処刑者を選び出したくらいだ、この処刑の名簿に。

アントニー　オクテイヴィアス、年功は君よりおれの方が一枚上だぞ。そこでだ、あの男にもいろいろ花を持たせてきたが、

それというのも、おれたちに与えられる中傷の数々、その荷物を取除いて、代りに背負ってもらうためなのだ。ちょうど黄金をかつぐロバと同じだ、重い荷物に呻き、汗を流し、鼻面を引きずられたり尻を叩かれたり、こっちの指図通りに動かざるを得ない。そして、注文通り財宝を運んでくれたら、荷物はもらって、帰っていただくだけのこと、あとは空荷のロバ同様、耳でも振って、公有地で草でも食べていればいいのだ。

オクテイヴィアス　思うようにすればいい。ただし、あの男は戦場での筋金入りの勇将だぞ。[5]

シーザー追悼演説で民心をつかみ、反逆者たちを追い払うと、アントニーは仲間とともに、いわゆる三頭政治を開始する。そして仲間の一人はオクテイヴィアスで、残りのもう一人がレピダスである。つまりレピダスは執政官としてそういう巨頭の地位にあるが、その彼を、使い捨て自由な「ただの小道具[6]」とみなす、アントニーの醒めた非情さに注目したい。彼のことばで明らかなように、もともとレピダスを仲間に加えたのは、世間から与えられる自分への攻撃を軽くし、できれば責任を肩代わりしてもらうためだという。問題は、そのような姿勢から、どんな政治の結実が期待できるかということではない。『ジュリアス・シーザー』はその期待に答えないし、そういう問題を扱ってはいない。そこで描かれるのは、やはり、政治世界の残酷さや醜悪さで、必要なのはその側面の冷徹な認識でよいだろう。ただ、ものごとは為政者と一般大衆との関係に及び、利用され、使い捨てられる「庶民の小道具化」を懸念しないわけにはいかなくなるだろう。

政治家は崇高な志操を抱くべきで、それによって「人間の小道具化」は解消されるというのは、楽観的な理想論である。政治世界では、すべてを呑み込む巨大な化物、政治メカニズムがそれを許さない、という理解である。『ジュリアス・シーザー』は初めから終りまで、その力学で活発に動いている。「人間の非人間化」を示す例は二、三にとどまることはない。例えば人間は「支持してくれる力」であり、その人間の表わす「効果」や「価値」に転化している。物語の初めで、政治的性格の体現者キャシアスがブルータスに接近するのはそのためだし、そのことは仲間の熱血漢キャスカとの対話で明らかになる。また、実現こそしなかったが、シセローを同志に加えようと考えるとき、仲間の一人メテラスの主張するシセロー観も、その視点によっている。反逆者とはいえ高位の政治家たちの、それぞれの例を次に挙げておく。

キャシアス　……さあ、キャスカ、君とおれとは夜明け前に、もう一度ブルータスを屋敷に訪ねよう。あの男の心は、もうほとんどこちらのものだ、それで、もう一度会えば、すっかりこっちのものになる。

キャスカ　ああ、あの男は万人の崇拝のまとだ。おれたちがやったら罪と見えることも、あの男の支持を得れば、いわば見事な錬金術だ、そのまま美徳と功績に変貌する。

キャシアス　あの男の人物、その値打ち、そして我々がどんなに彼を必要としているか、それはまさに君のいった通りだ。[7]

キャシアス　ところで、シセローはどうする？　当ってみようか？　強力な同志になると思うが。

キャスカ　はずしておく手はない。

シナ　そうだ、絶対はずしてはいけない。

メテラス　　ぜひ、仲間に入れよう、あの白髪で我々の受けもよくなる、我々の行為に対して、大衆の支持をもたらすはずだ。人びとはいうだろう、あの男の頭脳が我々の手を導いたのだと。無鉄砲な若さが少しも表面に出ないで、すべてはあの重厚の中に隠れるのだ。[8]

政治家アントニーの性格を、キャシアスは初めから見抜いている。彼はアントニーの同類であるが故に、その政治性が透けて見える。シーザーと一緒にアントニーも殺したい、と口にするのはキャシアスである。彼はいう、「今にわかるが、奴の正体は狡猾な策士だからな。それに、あの男の勢力は、うまく利用されると、おれたちみんなを困らせることにもなりかねない」[9]と。そして、彼の意見はまとを得ていた。シーザー暗殺後のアントニーは、まさにそのことば通りに振る舞ってくるのである。政治世界では目的が先行し、大義名分や手段はそのあとになる。しかし後者は、その目的のために、どのようなかたちを取ることもできる。シーザー暗殺を知ったとき、アントニーは異常なほど謙虚な、礼儀正しい態度に出る。彼は復讐という政治目的のために友情を利用し、謀反人たちの彼に対する懸念を吹き飛ばす。そして追悼演説の許可を得ると、彼は心に弁舌の自信をほのめかす。「彼は現在にどっぷり浸かって生きており、その要求に対する反応は誤まることがない。彼は未来を賭けるのである」[10]とハーリー・グランヴィル・バーカーは書く。ところが相手のブルータスは、「理想」や「未来」にどっぷり浸かっていて、自分のよく見えない「現在」を賭けるのである。

シーザー追悼演説で抱くアントニーの目的は、まず民衆の心をとらえ、できれば彼らを扇動して暗殺者たちへの反乱を起させることである。それゆえ彼の「現在」の必要は、民衆の心に訴える効果的な手段を取るということになる。彼は筋書を書くことができるし、それに従って演技ができる。彼が壇上に立つのは高位の為政者ではなく民衆の仲間としてだし、彼が話しかける対象は知性ではなくて、動かしやすい感情である。「ブルータスは公明正大な人です」[11]ということばも、数度いわれれば繰り返しの皮肉な効果として、感情的に疑念の生まれることを、彼は知っている。彼は涙を流すし、民衆に与えられたシーザーの遺言状をほのめかし、その亡きがらにある残酷な傷跡を見せる。おそらく演技の迫真性とともに、彼の利用する現実の具体的な事物ほど感情に訴えるものは少ないだろう。しかも彼は、それらの効果を人びとの反応にじっくり見極める、したたかな冷徹さを持っている。追悼演説でアントニーが勝つのは、ブルータスには欠ける彼の現実感覚、そして彼の体現する政治性の結実である。

ただし、この演説の聞き手、民衆の描かれ方を無視することはできない。彼らは少なくとも四人の市民で代表される。そして物語の初めで、凱旋して戻るシーザーを喜んで迎え、戯れに彼へ王冠が捧げられるのを見て、歓声をあげていた人たちだと推測できる。ところが、彼らはシーザーの暗殺で興奮するのに、ブルータスの演説を聞いてシーザーを暴君だったと思い込むし、さらにアントニーの演説では、ブルータスたちを残酷な謀反人と説得される。彼らは判断力に欠ける無知蒙昧な徒で、その存在は、まさに為政者の本音として、キャスカのことば「あのぼろ屑ども」に要約される。しかしその価値が軽視されるわけではない。民衆を仲間にすることの重要性は、彼らに対するブルータスおよびアントニーの演説それ自体が如実に物語っている。彼らは「一つの力」であり、ブルータス一味の屋敷を襲撃することで、その秘める狂暴性が示される。また愚かな彼らの暴力で、暗殺者たちの一人と同姓の詩人のシナが襲われるし、

この偶然の災禍は政治とは無関係な人間の政治的被害者の例となる。そして、こういう市民を扇動する「狡猾な策士」アントニーは、理想と廉潔から敗北するブルータスに比べると、いかにも割に合わない悪玉だろう。しかし汚れた政治世界で生き延びるのに、アントニーのような思考ならびに行動様式こそ強力な武器となるのだし、そうしなければならないのがいわば政治家の宿命でもあって、そこで示される政治のメカニズムそのものに、むしろ嫌悪や恐怖を感じなければいけないのではないか。

『ジュリアス・シーザー』は暗殺と復讐を扱う政治劇として、その皮肉な、あるいは非情な内幕をたくみに描く。結局、暗殺は愚かでむだな行為であり、少しも政治の浄化作用になっていない。暗殺という暴力はまた市民の暴力を誘うし、それにより政治と縁のない別の市民の被害も出る。人びとは、政治家も市民も、いわば政治に振り回されるのである。そして前に触れたように、この作品は単なる政治劇でなく、政治舞台における個人の感情も扱っている。それがブルータスの場合、不充分ながら、さらに人間の存在論まで発展することで、この作品が「四大悲劇」、とくに『マクベス』へ近づいてゆく。シーザー暗殺の直後、ブルータスは考える、「人間がいつかは死ぬことはわかっている。問題は要するに時間だけだ、生き永らえる日々をどこまで延ばせるか、ただそれだけのことだ」[12]と。また、戦いに敗れた彼の最期のことばは、「夜の闇が今や私の眼の上にかぶさっている。私の身体は休息を求めている。振り返れば、それもこの現在の瞬間にたどりつこうと、ただあれこれ動き回ってきたにすぎない」[13]というものである。ブルータス自身による自分の人生の要約は、いわば悲劇の主人公の資格を越えて、人間運命の悲劇性を暗示する。彼にとっては、勝利も敗北も今や単なる「動き」にすぎず、そこには人生の無常感がかなりただよう。また政治活動の不毛や、政治に振り回される人間行動の姿に、人間の卑小さ、人間の無力さが示されてくる。そして、ものごとの結果如何にかかわらず、時間は着実に流れており、人間は死を迎えるのみである。『ジュリアス・シーザー』では、実際の言及は少ないのだが、人間運命の悲劇性に基づく人間存在への暗い凝視が広く張り巡らされている。

註

テキストはT. S. Dorsch (ed.): *Julius Caesar*, (The Arden Shakespeare) (1955; rpt. London: Methuen, 1972) を用いた。後註における作品の幕、場、行数はそれによる。

(1) Geoffrey Bullough, 'Julius Caesar and Plutarch', in Leonard F. Dean, ed., *Julius Caesar* (Twentieth Century Interpretations) (New Jersey: Prentice-Hall, 1968), p. 94.

(2) *Julius Caesar*, II. i. 188—189.

(3) *Idid.*, I. ii. 255.

(4) L. C. Knights, 'Shakespeare and Political Wisdom: A Note on the Personalism of *Julius Caesar*', in Leonard F. Dean, ed., op. cit., p. 54.

(5) *Julius Caesar*, IV. i. 7—28.

(6) *Ibid.*, IV. i. 40.

(7) *Ibid.*, I. iii. 153—162.

(8) *Ibid.*, II. i. 141—149.

(9) *Ibid.*, II. i. 157—160.

(10) Harley Granville-Barker, 'Antony', in Leonard F. Dean, ed., op. cit., p. 25.

(11) *Julius Caesar*, III. ii. 84.

(12) *Ibid.*, III. ii. 99—100.

(13) *Ibid.*, V. V. 41—42.